7月定例活動

森の調査

蒸し暑い7月の定例活動は、毎年恒例の森の調査である。この日は、オアシスの森で最近広がっている「カシノナガキクイムシ被害木」を調査することとなった。カシノナガキクイムシ（以下カシナガ）は、ナラ類やシイ・カシ類の樹木に穿入し、その穿孔内にラファエレア・クエルキボーラという糸状菌（カビ）を発生させる。これが樹木の道管を目詰まりさせる原因となり、間もなく木は通水障害により葉を枯らす。

近年このナラ枯れ被害が大きくとらえられており、名古屋市内では2004年に猪高緑地で初見されて以来、今では東部丘陵の雑木林で普通に見られる状況となっている。

オアシスの森でも2005年には確認され、今回の調査でも51本の罹患木と、内5本の枯死木が確認された。7月下旬という時期から、今年の被害がこれですべてとは言い切れないが、いずれにせよ被害の拡大傾向は続いている。

カシナガ被害の特徴として、主に直径30cm以上の大径木が狙われ、比較的細い（若い）樹木は被害を受けても枯死まで至らないケースも多く、罹患木における枯死率は20%前後と考えられ、マツクイムシ被害のように全滅するわけではない。また、1930年代に被害が確認されて以後、1980年まで散発的な発生で大発生には至っていないことなどから、今回の被害拡大は、かつて薪炭材であったコナラやアベマキ、アラカシなどが放置され高齢化・大径木化したことと深く関係しているようだ。以前のマツクイムシ被害から今回のカシナガ被害へと、放置が進む日本の里山林は未知の段階を迎えているのかもしれない。（眞弓）

▲森の調査のようす

〔参考文献：ナラ枯れの被害をどう減らすか―里山林を守るために―（独法）森林総合研究所関西支所〕

8月定例活動

クラフト・巣箱づくり

8月の定例活動は、雨が降ったりやんだりの中、相生小学校研修室で巣箱作りを行う。参加者は12名ほどで、野浪さんが用意して下さった材料で手慣れた人は手際よく作っていくが、巣箱作り初めての人は少し時間が掛かりました。

それでも昼までに予定の個数を作ることが出来ました。作った巣箱は後日防腐塗料を塗って完全に仕上げました。私自身は初めての巣箱作りの経験でしたが、作った巣箱に鳥が少しでも入ってくれることを願っています。

午後は竹で各自がマイ箸などを作りました。参加者の皆さん暑い中お疲れ様でした。

（森　勝）

▲新しい巣箱が完成！

特別活動

巣箱かけ

11月に入り、急に冷え込んでヤマハゼ類が美しい。ヒヨドリやウグイスなど様々な野鳥の鳴き声が混じり、心地よいにぎやかさ。参加者が少なく少々気落ちしているところへ、渡辺さんが息子さんと共に現れて、急に活気づいた。巣箱のかけ降ろしに、若い力は大変な戦力になる。

花の小径から散策エリアの間は、営巣に使われたものはなく、降ろすときに手応えを感じても、土バチやスズメバチに利用されていた。いのちの谷のものは巣一杯にスズメバチの巣が出来ていて、その造形の見事さに見惚れた。

稲田口でははじめての利用されたものに出会い、清掃した後、新しい物を2個追加、3個が並ぶ団地とした。雑木のエリアと小屋横のものも営巣されていた。シンボルツリー横のものは、即利用できるまでに完成されていたが、何かの都合で途中放棄していた。

初期と比べると、何となくシジュウカラの数が減っているように感じて、古澤先生に尋ねてみると、平針の方でも減っている様子。シジュウカラはたくさんの虫を食べて森を守ってくれています。せめて現状維持をしたいものです。まだ使える古い巣箱はそのまま残し、横に新しいものを掛けました。シジュウカラはどちらが好きなのか、来年の点検が楽しみです。（伊藤　晶）